

## 2 「放課後子どもプラン」部会

### ◆第1回部会

期 日：平成24年6月26日（火）  
会 場：大津合同庁舎 5E会議室  
出席者：神部委員（部会長）、中澤委員、廣岡委員、  
山田委員、岡本委員、久保委員  
事務局：県生涯学習課（3名）  
県子ども・青少年局（2名）



（第1回部会）

### －協議概要－

#### 1. 今年度のテーマについて

- (1) 昨年度の部会協議で確認できたこと
- ・放課後は子どもたちの大切な育ちの場である。
  - ・大人や社会で子どもたちの放課後を支えていく必要がある。
- (2) 今年度の部会テーマ
- 「子どもたちの育ちの場を豊かにしていくために」  
～子どもの育ちと、大人のかかわり～

#### 2. 協 議【意見概要】

##### ○部会長より提起

- ・今年度は、支援する大人の側に焦点を当て、『大人が子どもたちにどう関わっていけば豊かな育ちが生まれるのか。』という部分を深めていきたい。

##### ○委員からの主な意見

- ・子どもには、群れておもしろい遊びという経験が少ない。放課後子ども教室へ参加する児童は、群れておもしろい遊びを期待しているのではないだろうか。
- ・子どもには、設定された遊びに対する抵抗感がある。子どもの発想の中からこんなことがしたいということが一番で、大人が何かを企画して与えた場合、終わったあとに「遊んでいい？」という言葉が出てくることが多い。
- ・学童の1年間の中には、自分の親、自分の子ということと関係なく活動する場面が何度かある。その中で大人と子どもの様々なかかわりが生まれている。
- ・子どもではなく、親が学童から離れづらくなるという場合がある。子どものことで、一緒に喜んだり、心配したりする第三者（指導員）がいなくなることを寂しく感じるようである。親への支援という視点も必要ではないか。
- ・放課後子ども教室には、地域の大人（団塊の世代の方が中心）が関わっている。
- ・おじいさん・おばあさんと接する時間を増やすこと、ふれあいの場を持つことで、子どもにいい影響が出ている。
- ・子ども教室に来ていたり学童に入っていたりする子にとっては、そこに時間、仲間、場所があるから、集団での遊びが生まれているが、そういう場所に来ていない子に、集団遊びを保障することがかえって難しい時代になったと感じる。
- ・学童の指導に、指導員以外が関わることは難しい。
- ・地域のボランティアが運営されている活動に、学童クラブの児童が参加するという事例がある。こういう取組を増やしていけばいいのではないか。
- ・直接的なかかわりではないが、学童クラブから子どもが帰るときに、地域の大人が時間を合わせて外に出て、声かけを行うなどの見守りサポートが定着しているところがある。

##### ○まとめ、次回協議への展望

- ・さらに焦点を絞り、子どもたちの育ちの場を豊かにしていくための大人のかかわりについて考えていきたい。そこで、今年度は、さらに幅広い視点を獲得するためにも、両事業で子どもとかかわる方へのアンケートを行い、次回の議論につなげていくこととする。

## ◆アンケートの実施

実施数：164（放課後子ども教室関係者10、放課後児童クラブ関係者154）

実施時期等：8～9月実施 主に記述回答式 委員の関係する教室・学童等の指導者を対象

### －結果概略－

#### 問1「子どもの感心する姿と良い面をのばすための工夫」について

- ① 子どもの感心する姿への記述
  - ・放課後に見られる子どもは、素直でやさしく、子どもらしさを失っておらず、大人から見て感心できる姿がたくさん見られるとの意見が多かった。
- ② 良い面をのばすための工夫に関する記述
  - ・指導者は、子どもの良い面をのばすために様々な工夫をしている。

##### 接し方として

- ・ほめる
- ・よりそう
- ・見守る
- ・声をかける
- ・子どもの目線に立つ
- ・あいさつを投げかける
- ・いっしょに活動する 等

##### 姿勢、心がけとして

- ・子どもの行為にも感謝の思いをもって接する
- ・手本となるよう行動する愛情を持って接する
- ・子どもに解決させる
- ・信頼を裏切らない
- ・異年齢で活動することを仕組む
- ・嘘をついたり適当な対応をしたりしない 等

まとめ：子どもたちには感心することが多く、それを関わりのある大人（指導員）が支えている。

#### 問2「子どもの気になる姿と解決を目指す工夫や心がけ」について

- ① 子どもの気になる姿の解決を目指す工夫や心がけの記述
  - ・子どもには、（問1）でわかった感心する姿が見られる反面、気になる姿も増えてきているという意見が多く出されていた。その内容で特に目立ったものは、自信がない、うまく人とかかわれない、粘り強さに欠けるなどである。しかし、それらの姿の背景には、親や家庭の問題を含んだ複雑な原因が見られた。

まとめ：年々気になる子どもは増えている。放課後に子どもを指導する教室や児童クラブが個別に工夫や努力するだけでは解決できなくなっているのではないかと。

#### 問3「子ども教室と児童クラブとの連携、及び地域の他事業との連携の可能性」について

- ① 子ども教室と児童クラブの連携についての記述
  - ・回答者の多くをしめる学童クラブ関係者は、子ども教室の実態が理解できていない。
- ② 地域まで広げた幅広い連携についての記述
  - ・連携への思いは多く認められるが、実際に行われている連携例は、たまたま施設同士が近いというものが中心で、積極的な連携を行っている姿はあまり見られない。

まとめ：子ども教室・学童クラブの中だけで考えるのではなく、様々な連携を工夫しながら子どもの育ちを支えられるようになっていくべきではないかと。

## ◆第2回部会

期 日：平成24年10月10日（水）

会 場：野洲市中学学童保育所

出席者：神部委員（部会長）、津田委員、中澤委員、  
廣岡委員、山田委員、岡本委員、久保委員

事務局：県生涯学習課（4名）

県子ども・青少年局（2名）

現 地：中主学童保育所所長 芝崎みどり氏

野洲市より傍聴4名



（第2回部会）

## －視察概略－

### 1. 所長説明【内容よりテーマとの関わりがある部分】

- ・保護者の多様な要望や年々支援児が増加している現状の中、指導員の知識や経験だけで対応できないこともあり、家庭との連携、市、県などの関係機関との連携も必要である。
- ・指導員と保護者との連携で子どもの課題を解決した例がいくつもある。一言の声かけが保護者に響くことがある。
- ・学校との情報共有は最初困難があったが、学童や行政からの粘り強い働きかけで学校にも連携の必要性を感じてもらえるようになってきた。
- ・安全・安心で、子どもたちが楽しく元気に暮らせる場所を目指している。

### 2. 保育視察

- ・多くの指導員に見守られ、落ち着いた雰囲気の中、集中して宿題に取り組んでいた。
- ・見守ることが中心に行われ、支援が必要な児童には、そばについて指導が行われていた。
- ・早く宿題が終わった児童には指導員による読み聞かせが行われていた。



(宿題をする子どもたち)

## －協議概要－

### 1. アンケート結果（前頁結果概略に記載）及び経過について説明

### 2. 協議【意見概要】

#### ○部会長より提起

- ・検討課題の「大人のかかわり」については、地域の大人や指導員をイメージしてきたが、親も含めて、子どもの育ちをより豊かにすることについてイメージをふくらませていきたい。

#### ○委員からの主な意見

- ・アンケートから、学童の指導者は、放課後子ども教室のことを知らないことが見えてきた。学童と地域をつなぐ仕組みづくりに行政が取り組まなければならないと感じた。
- ・子ども教室や学童を子育て支援のサービスと捉え、とにかく子どもを預かってもらえばいいという考えで、自らの要求のみを訴える親が増えてきているように感じる。
- ・親との関係を大切にしてきたが、世話を焼かれないという親が増えたり、プライバシー保護のため実名を挙げた話ができなくなったり、社会が変化する中で親も変化してきている。
- ・地域ごとの差も大きい。都市部では、習い事をいくつもしている子をせかすように連れて帰る親や、月曜日にもものすごく疲れていると感じる子などを多く見てきた。
- ・保護者会運営の学童は、親子で一緒に活動する機会も多い。そういう機会が多くなると、自分の子どもだけにしか向かなかった親の目が他の子どもにも向けられるようになり、他の子を理解することが増えてくる。また、子育てを学び合う保護者の異年齢交流も生まれている。
- ・学童ではお迎えがあるので親と毎日顔を合わすが、その場で子どものことをひとことふたこと話すことで、いい関係が生まれているように感じている。
- ・学童を利用している半数程度が休日に実施している子ども教室にも進んで参加している。自ら積極的に事業に関わろうとする保護者もあり、地域の方の取組に対する理解や連携は深まってきている。しかし、問題は、指導者の話を拒絶し、地域との関係も望まない親である。
- ・学童では以前、情報交換や引き継ぎなど保育園との連携は定期的に行われていた。保育園と児童クラブの連携はさらに必要であるという声もある。また、竹細工をする地域の人に来ていただいて体験するなどの地域の人との交流もあったが、今は忙しくて、時間も短くなって難しい。
- ・忙しいから余計に、宿題などの部分で学童にも地域の人に来てもらい見てもらうというような形が生まれたいのではないかと感じる。
- ・地域の人を巻き込んで活動しており、地域の総合型スポーツクラブとの連携も行っている。しかし、地域の方も忙しいので参加は週1回程度が限度ではないかと感じている。また、参加者の保護者から行事をするときに責任の所在を問われることがある。関わるものは、細心の注意

を払って子どもを見なければならぬという難しさもあるのではないかと。

### ○まとめ、次回協議への展望

・親の課題や親との関係を作る難しさについて多くの意見が出された。「子どもの育ちを支える大人のかかわりをさらに高めていくには」という検討課題を深めるためには、地域の人と親という2つの視点から考える必要がありそうである。地域の人に関する課題、親に関する課題等をさらに抽出し、それらを整理し、その中からアイデアを見つけていきたい。

## ◆第3回部会

期 日：平成25年1月11日（金）

会 場：県庁本館7階大会

出席者：神部委員（部会長）、津田委員、中澤委員、  
廣岡委員、山田委員、岡本委員、久保委員

事務局：県生涯学習課（3名）

県子ども・青少年局（2名）



（第3回部会）

### ー協議概要ー

#### 1. 年間の部会経過、まとめの方向性について説明

#### 2. 協 議【意見概要】

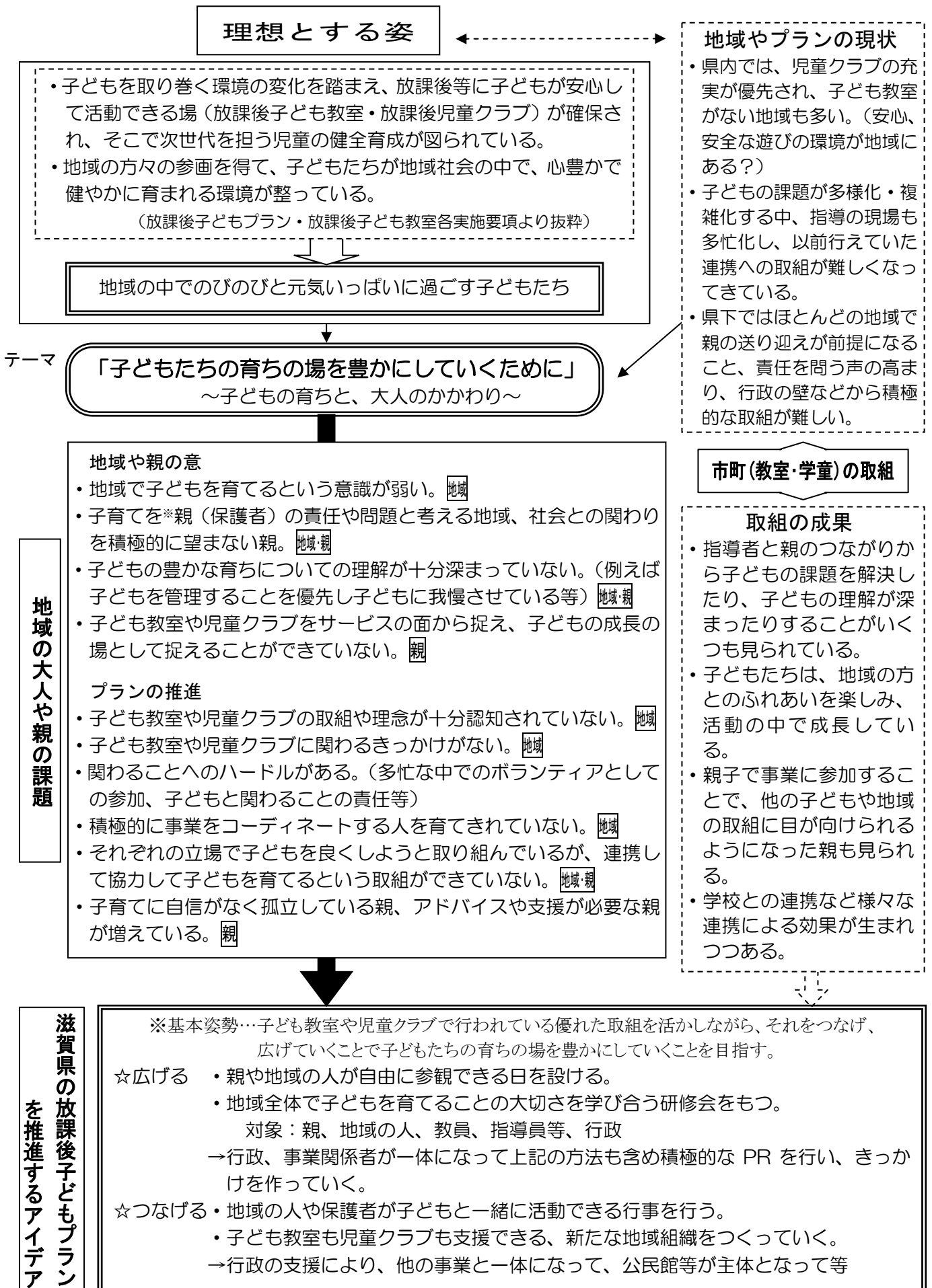
##### ○部会長より提起

・今回まで検討を重ねてきた課題や取組を整理し、実際に事業に関わっている方に提供できるアイデアとしてまとめ、放課後子どもプランの推進につなげていきたい。

##### ○委員からの主な意見

- ・子ども教室は、実施地域の子どものもつ家庭にしか理解されていない。まだまだPR不足ということが言えるように思う。もっと積極的にPRを行うことや、運営する側が地域のお年寄りなどに気楽に声をかけていくことで、人が人を呼び、教室に関わる人の輪が広がっていくのではないかと。
- ・知らないことで構えてしまうが、関わることでよさがわかってもらえることがある。
- ・地域の人を巻き込んでいくキーパーソン（コーディネーター）が重要である。
- ・親が子どもを育てるとはどういうことなのかということを経験で共通理解していくことが大切ではないかと。
- ・地域にいい取組があっても、そこに子どもを参加させるということにつながっていかないのも親の意識の低さに起因していると感じる。
- ・子どもの育ちということを十分考えられていないと感じる親や、教室・学童にあずければ終わりと考えている親も多い。家庭教育支援として行われている講座等の情報を指導員やボランティアからも積極的に提供して、親の学びの輪を広げていくことや、両事業に関わる親の課題をもとに、親同士、スタッフ、地域の人と一緒に学ぶ研修会を意図的に行っていくことが必要である。そういう機会は、親育ちの機会だけでなく、親同士、親と地域の顔つなぎの場ともなる。
- ・成功しているのは、子どもの意欲を大人がうまく引き出している場合ではないかと。子どもの意欲を引き出す地域の取組が大切ではないかと。
- ・子どもの関わり方、言葉がけなどを大人が学ぶことが大切である。
- ・地域の人と子どもたちとの関わりを深めるきっかけが必要である。行政も積極的に支援して、既存の「もの」を中心として、子ども・保護者・地域の人・学校が集える祭りなどを実施し、地域の人々の理解や意欲を高めるような取組が重要ではないかと。
- ・行政として、学童保育の支援にも取り組んでいる例もある。子どもの体験は親同士の話題にもなり、親の参加のきっかけにもつながっている。
- ・知り合うことからすべてが始まる。公民館や地域の行事、あるいは、学童の行事でもいいので、スタッフや地域の人や親が、まずは、年に1回一緒に創っていく機会を設ける。そのことから相互理解が深まっていくのではないかと。

## ◆放課後子どもプラン部会まとめ



※この頁で表記する「親」とは全て親（保護者）のことである。